東方學報 京都第 100 冊（2025）：360–336 頁

# ゴール朝成立史再論

稲葉　穣

## はじめに

現在のアフガニスタン・イスラーム國の中央部にはヒンドゥークシュ山脈から分岐したいくつもの山脈が屹立し，大きな山の塊をなしている。以下本稿ではそれをアフガン中央山塊と呼ぶ。この山は歴史的に中央アジア，南アジア，西アジアを隔てるフロンティアとして機能したのだが，東南側インド亞大陸からの濕ったモンスーンを受け止め，雨や雪の形で多くの水を蓄えている。これらの水は山塊の中を東西南北に流れ下り，いくつかの大きな河川となって山塊から外に向けて流出する。その流出點には扇狀地が形成され，いわゆる山麓オアシス都市が出現することになる。そのような山麓オアシス都市は中央山塊を取り巻くように位置し，それぞれのオアシスを結びつける環狀の周回ルートが出現する。さらにユーラシア東西を結ぶ交易路がこの山麓オアシスにおいて，環狀ルートと接續することで，この地域は自然障壁であると同時に異なる歴史世界を結びつけるチャンネルをも提供するという，歴史的フロンティアとしての機能を果たしてきたのである。

さて，中央山塊から流出する川の一つに，この山塊をを南北二つに分割するように東から西へと流れるハリールード Harī Rūd 川がある。この川の平地への流出點にあるオアシス上にヘラート Herat のまちは位置している。ハリールード川の，ヘラートより上流の部分，その左岸，南側の地域が歴史的にゴール Ghor と呼ばれてきた。その正確な範圍はきちんと定めがたいが，十世紀の地理書 *al-Masālik wa al-Mamālik* は，ヘラート，ファラー Farāh，バラダイ・ダーワル Baladay Dāwar，リバーテ・カルヴァーン Ribāṭ-i Karvān，ガルジ・アッシャール Gharj al-Shār を頂點とする五角形で圍まれたのがゴールである，と定義している（Iṣṭakhrī : 272, 圖 1 參照）[1]。

---

1） バラダイ・ダーワルはペルシア語の Zamīn Dāwar にあたる（詳しくは後述）。リバーテ・カルヴァーンは現在のヤカウラング Yakawlang 近郊の地名（稲葉 2007 參照），ガルジ・アッシャールは，ハリールード川の北岸，パロパミソス山脈とムルガーブ川最上流部を含↗

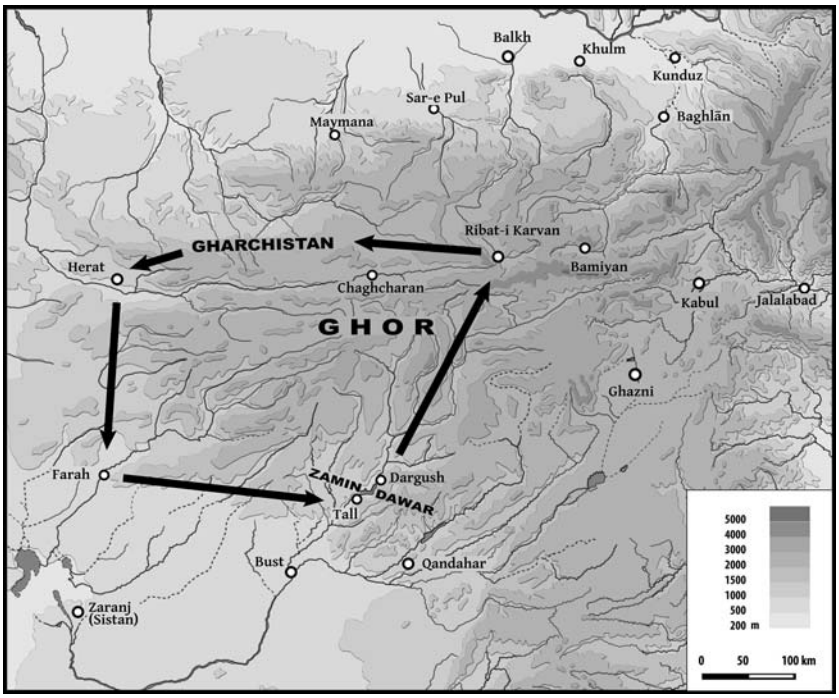



圖 1　ゴール地方を圍む五角形

十二世紀にこの地域から興り，中央山塊を周回する環狀ルートとそのルート上のオアシス都市群を支配したのみならず，先驅者であるガズナ朝のあとを追って北インドに進出し，インドのイスラーム時代の幕を開けたのがゴール朝であった。

その重要性に比して，歷史や政治體制が十分に明らかになっていないのがこの王朝の特徵で，そもそもの都が置かれたフィールーズクーフ Fīrūzkūh についてもその所在や存立の仕方については前世紀後半，長く議論があった。筆者もアフガニスタンの歷史地理的側面からこの問題に迫ることができないかと考え，拙い論考を發表したことがある（稻葉 1999）。しかし筆者の力不足と利用できる情報の希薄さとが相俟って，注目すべき結論を得ることは適わなかった。

ところがその數年後，第一次ターリバーン政權が崩壞した後に，倒壞の危機に瀕していたジャーム Jam のミナレット（後述）の狀況調査を主目的とした調査隊がアフガン中央山塊に分け入り，多くの新しい發見をもたらした。調査隊の中心であったトーマス David C. Thomas は，連名で何本かの論考を發表するとともに，2018 年にはこの謎に滿

---

↘ む歷史的地名であるガルチスターン Gharchistān のこと。Gharj は，バクトリア語で「山」を示す garč-に由來し（吉田 1998），*shār* はガルチスターンの王の稱號であった。

ちた王朝の歴史に關する單著を刊行した（Thomas 2018）。さらに美術史家パテル Alka Patel は，トーマスらが撮影した寫眞資料と前世紀に蓄積された資料をあわせ，アフガン中央山塊の文化と建築史に關する詳細な研究を發表した（Patel 2022）。

一方，1979 年にはじまる同地の混亂はこれまで四十年餘の間に貴重な文化資料のマーケットへの流出という事態を生んできた。スコイエン・コレクションに收納される佛敎文獻[2]や，ハリーリー・コレクションにおさめられるバクトリア語世俗文書群[3]がそれにあたるが，破壞された大佛で名高いバーミヤーン Bāmiyān 遺跡の西方，中央山塊の中央部に近い地域に由來すると考えられる重要な文書群もその一部である。それらは近世ペルシア語やユダヤ・ペルシア語 Judeo Persian で書かれた手紙・契約文書などの世俗文書で，現在その研究と公刊が活發に進められている[4]。

このような新しい調査の成果や，新發現資料群に基づく研究はこれからますます活發に發表されることが期待できるが，こういった新たな研究狀況を用いて，以前に考察しようとした問題を再び考えることができるのではないかというのが本稿の執筆目的である。

具體的には首都フィールーズクーフの所在に關する現在の見解とその問題點を整理し，さらにゴール朝の發展と擴大のプロセスを再考して，歷史的アフガニスタンというフレームワークの中にこれをどう位置づけうるかを考えたいと思う。

## 1. フィールーズクーフを巡る諸問題

四半世紀前に發表した拙稿での行論の順番とは異なり，まず最初にフィールーズクーフの所在に關する近年の議論について確認しておこう。十三世紀にジューズジャーニー Minhāj-i Sīrāj Jūzjānī によって著されたペルシア語年代記 *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* に，ゴール朝の都 *dār al-mulk* として登場するフィールーズクーフが現在のどこにあたるのかは，二十世紀のゴール朝研究で最も熱心に議論された問題であったと言っていい。それらの議論の詳細は前稿にまとめてあるのだが（稻葉 1999 : 33-35），歷史資料に見えるフィールーズクーフの所在についてはじめて言及したのはおそらく，後にイギリス王立地理學協會の

2） これに關しては松田 2020 を參照。
3） これらの文書群および關連資料はシムス=ウィリアムス Nicholas Sims-Williams によって發表されている。Sims-Williams 2000 ; 2007 ; 2012 ; 2025 を參照。
4） オクスフォード大學を據點にアーザード Arezou Azad の主導で進められている研究プロジェクト。詳細は Invisible East webpage（https://invisibleeast.web.ox.ac.uk/）參照。

會長をつとめたホルディック Sir Thomas Holdich であった。十九世紀後半からアフガニスタンにおいて地理調査を進めていたホルディックは，ゴール地方の南西部，當時のゴール州の中心であったタイワラ Taywara のまちが，古い時代にフィールーズクーフであったとしても不思議ではない，と述べた（Holdich 1910 : 222）。

1930 年代以降アフガニスタンにおいてほぼ獨占的に考古調査を行っていたフランス・アフガニスタン考古學派遣團（DAFA : Délégation Archéologique Française en Afghanistan）のメンバーであったマリク Andre Maricq はそれから半世紀ほど後，アフガニスタンの高名な歴史家コーフザード Ahmad ʻAlī Kohzad の依頼を受けてハリールード川中流域を調査し，それまで現地の人にしか知られていなかった，山間の險しい地に屹立する地上高約 60 m の驚異的かつ見事なミナレットを調査し，その成果を報告書として刊行した（Maricq & Wiet 1959）。マリクはその中で，このミナレットの所在地であるジャームの地こそがフィールーズクーフだったのだと述べた。確かにそう思わせるほどに，ミナレットの建築は强烈な印象を與えたのであろうが，一方でミナレットが建っている場所はあまりに邊鄙で，そのようなところに大帝國の都が存在し得たのかという疑問から，まもなくレシュニク Lorenz Leshnik がマリクの議論に對する反對意見を發表することとなった。レシュニクは，ジャームのミナレットがある狹隘な谷間には，都に相應しいだけの人數が居住できる住居や，王宮を營むためのファシリティーがおさまる空間的餘裕がないこと，フィールーズクーフと冬の都ザミーン・ダーワル（詳しくは後述）の間が四十ファルサングであったというジューズジャーニーの記述（Jūzjānī : i, 364）はジャームの位置と符合しない，というあたりを主とした論點としてジャーム＝フィールーズクーフ說に反論したのである（Leshnik 1968–69）。

その後，1970 年代にヘルベルク Werner Herberg は現地でのフィールドワークを行い，やはりこの狹隘な溪谷に大きな都があったとは考えにくく，さらにジャームにはジューズジャーニーが記すようなファシリティーにあたりそうな遺構が見られない，と述べた（Herberg 1976）。一方ジューズジャーニーをはじめとする文獻資料の記述を詳細に檢討したヴェルチェリン Giorgio Vercellin は，ジャームの地形や地勢が實は文獻資料の記述と適合することを證し，少なくとも文獻上はジャームとフィールーズクーフの同定は支持されるとした（Vercellin 1976）。筆者の拙い研究もこの路線に乘るものであった。その後，ジャームの地理的條件に疑問は殘るものの，かといってたとえばタイワラに同定することを積極的に示す證據も見つからない，という狀況が續いていた。

2000 年代初頭，そこに新しい證據をもたらしたのが前述のトーマスらの調査隊であった。彼らは三次にわたる調査の中で，ヘルベルクの報告とは異なり，ミナレット周邊の山頂部や斜面あるいはジャームの近邊でゴール朝時代と覺しき遺構をいくつも發見した。

そして，この渓谷に重要な建築物が建ち並んでいたことは，この地がフィールーズクーフであったことを強く示唆するとしたのである。トーマスらの調査と並行して，あるいはその後に發表されたピンダー=ウィルソン Ralph Pinder-Willson（2001），スルデル=トミン Janine Sourdel-Thomine（2004），フラッド Finbarr Bary Flood（2009）らの研究もすべてジャームがフィールーズクーフであるという前提に立ってのものだった。前述のトーマスによる單著やパテルの建築史研究はそのような見方をさらに確立するのに大きく寄與している。

かくしてもはや誰もジャームがフィールーズクーフの所在地であったことに疑問を持っていない，という狀況になっているが，一方でかつてジャーム＝フィールーズクーフの同定に對して提出された疑義や問題點が全て解決しているわけではないという點には留意が必要である。特に以下の三點はさらなる考究が必要であろう。①狹隘な谷に果たして本當に都と呼べる規模の住民や建造物が存在し得たのか。②周邊に食料生產が可能な耕地がない場所でどうやって生活を維持し得たのか。③さらにはそのような場所がゴール朝の滅亡まで都とされ，存續していたのはなぜなのか。以下でこれらの點についてやや詳しく考えてみたい。

## 2. 階段式住居

第一の問題は，ジャームのミナレットが位置している場所が狹隘な谷間が續く川の合流點であり，様々な建物を許容する物理的空間を缺くのではないかという至極もっともな批判である。さらに近年の度重なる川の增水に見られるように，いったん水量が增すと川沿いの建物はもしあったとしても甚大な被害を被りそうにも思われる[5)]。しかし，トーマスらはミナレット周邊の山腹から發見された建築の痕跡などから見て，建築の仕方によっては數千人規模の住民を受け入れることが可能だったのではないかと示唆している（Thomas 2018 : 210-211, 275）。彼が類例として示すのは，アフガニスタン東部のヌーリスターン Nūristān 地方の階段式住居群である。

ヌーリスターンはヒンドゥークシュ山脈中央部の東南麓に廣がるアフガニスタンで唯一のジャングル，雨林地帶である。カーブル川の支流であるクナール Kunār 川やアリーシャーング Alīshāng 川，アリーンガール ʻAlīngār 川の上流，ヒンドゥークシュへとつながる險しい渓谷と山々からなる地域で，山の斜面に張り付くようにつくられる階段式住

5） 2024 年 5 月，ミナレット下部が川の增水により濁流に沈んだ樣子がヴィデオで撮影されている。https://www.facebook.com/100083584861995/videos/2786248314871381.

居が傳統的によく知られている[6]。現在でも，たとえば住宅事情があまり芳しくないカーブル市において，通常なら宅地にならないような急な斜面に貼り付くように作られた，二階建て，三階建ての住宅を目にすることができ，それらがこの地域では昔からそう珍しいものではなかったことが偲ばれる。圖 2 はトーマスが例として提示する復元豫想圖だが，このようにしてこの狹隘な谷間にも數千人の人々を收容することができたのではないか，とするのである。

この數，あるいはこの復元豫想圖の當否はなんとも判斷しにくいが，それでもこれがレシュニクらによるジャーム說批判の最初の點に對しての一應の回答になっていることは間違いない。しかしその回答は逆に，ではなぜそんな手間のかかる場所にフィールーズクーフを建設し，それが都と見なされ續けたのかというさらなる疑問を呼び起こす。

その點に關連するのが，二番目の食糧供給に關わる問題である。今も昔もこの險しく急峻な地形の周圍には十分な耕作地がないため，もしトーマスが想定するごとく，何千人規模の住民がいたとすれば，その食料は外部から運び入れねばならなかったはずであ

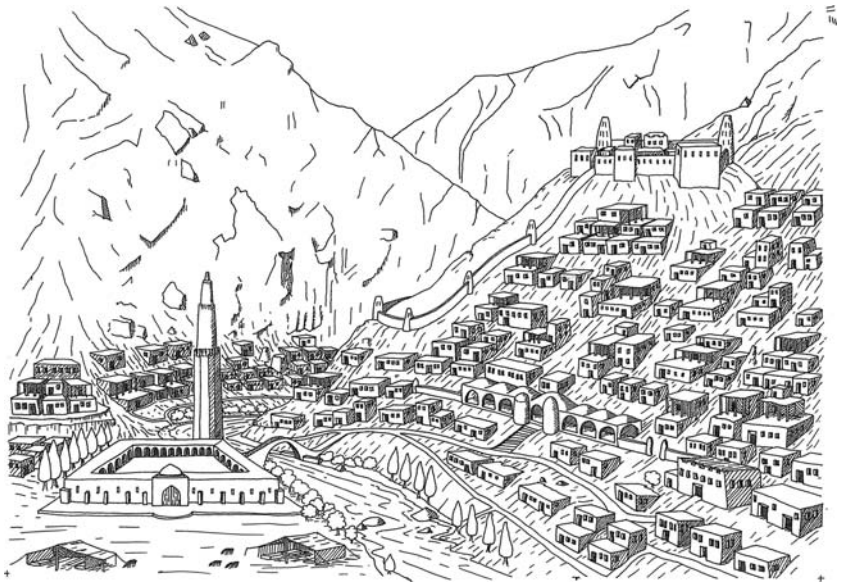


圖 2　ジャーム＝フィールーズクーフの復元豫想圖（Thomas 2018 : 209, Figure 5 : 59）

6）　ちなみにヌーリスターンはかつて Kāfiristān＝異敎徒の地として知られた場所で，十九世紀までイスラーム化していなかったとされる。さらにこの地域の言語は系統的にはインド・イラン語派の非常に古い分派とされ，この地域が周圍とそれほど密接に交流してこなかったゆえにそのような古い言語を保持していたのだ，と說明される。この地域が周邊から孤立した文化を維持したことと，峻險で困難な地勢には有意な關係があるのだろう。

るが，現在のところどこからどうやってそれを行ったかについて説得的な説明は提出されていない。食糧供給の問題や地理的困難さを含めたジャーム＝フィールーズクーフの同定についてトーマスは様々な側面から説明を試みている（Thomas 2018 : 309–323）。ただ，トーマス自身が認めるように，食糧供給の問題，都市規模の問題などを考究するためにはさらなる現地調査が必要であり[7]，それについては今後の状況の好轉を期待するしかない。

## 3. 儀禮のための都？

さて，食糧供給の問題が當面解決不可能だとして，第三番目の問い，すなわちこの隔絕した場所がなぜゴール朝の都となり，一定期間そうであり續けたのかという點について，これまでの研究はどう回答しているのだろうか。トーマスは，ゴール朝のもととなったシャナスバーニー家[8]がそもそも遊牧民であったことを指摘し，夏營地として相應しい場所を選んだのだろうと想定している（Thomas 2018 : 244–245 ; cf. Patel 2022 : 87）。しかしそれでも，なぜ不便な場所を夏營地にしたのかという點についてはもう少し詳しく考える必要があろう。

トーマスやボール Warwick Ball が指摘するのは，この場所が防衛に適した場所であるという點である（Thomas 2018 : 68–69 ; Ball 2002）。狹隘な谷間，險しい山の斜面などなどは敵がこの地を攻めることを困難にしただろう，と言うのである。ところで 1987 年フランス・アフガニスタン考古學派遣團のメンバーだったルベール Marc Le Berre は，ゴールの北東，バーミヤーン方面につながる地域において，山稜に築かれ一定間隔で竝べられ

---

7） ラティモア Owen Lattimore は，前近代の文明社會において食料を運搬しようとする場合，それが人力であれ，駄獸によってであれ，それらが消費する食料と運搬によって得られる利益のバランスがとれるのは，道が平坦か山がちかによって多少の違いがあるものの，おおよそ 100 マイルの距離までであろうと指摘している（Lattimore 1962 : 479）。山がち，どころか極めて險しい地形に圍まれたジャームにおいてはその距離はもっと短かった可能性もあるが，いずれにせよそのコストを政治權力の要請によって棒引きにできたのかどうか，それを解明するためには，現代の當該地域における人間や駄獸の輸送能力や，十二世紀にゴール朝が利用できた様々な資源のポテンシャルなど，さらなる現地調査にとどまらず，いくつもの困難な問題と取り組まねばならないだろう。

8） 日本語ではこれまでシャンサバーニー家と呼ばれ，筆者も前稿ではその讀み方を用いていた。しかしこの家系名稱の語源については，すでに一世紀以上前にマルクヴァルト Josef Marquart がこれを中世ペルシア語の Gušnāsp の轉訛形ではないかと指摘しており（Marquart & De Groot 1915 : 289），レザーハーニー Khodadad Rezakhani はそれを受け，當該の名詞は Shansabānī ではなく Shanasbānī と讀む方が相應しいのではないかと提案している（Rezakhani 2021）。本稿はそれに從って王家の名稱をシャナスバーニーと表記する。

たごとくに點々と連なる，數多くの特徴的な小規模城塞址について報告した（Le Berre 1987）。1955 年にゴールに調査に入った梅棹忠夫は，ゴールの南西部，タイワラからヤハン Yakhan にかけての地域でやはり同様の建造物について報告している（梅棹 1956 : 82–83）。用途は正確には知れないものの，これらの小規模城塞がなんらかの軍事機能を持ったことは間違いないだろう。ボールは，これらの小城塞が一つの連なりとして防衛線を形成した，という假說を提示しているが，その一方で實はフィールーズクーフ近邊にはこのような小城塞が全く認められないという點にも注意を促している（Ball 2002 : 42）。ボール自身が指摘するように，この點はトーマスが想定するジャーム＝フィールーズクーフの有した軍事的機能とはうまく合致しないように見える。

パテルと同じくイスラーム建築史・美術史の專家であるスルデル=トミンは，2004 年，ルベールら DAFA が收集した資料を用いてジャームのミナレットに關するモノグラフを刊行した。フラッドの書評（Flood 2005）にあるように，本書はジャームのミナレットに關する建築史的考究を本格的に行ったという意味で大變重要な研究であるのだが，著者はやはりジャーム＝フィールーズクーフがどのような場所だったかという點にも觸れている。上述のトーマスやボール，パテルらの研究よりも先行するため，本書は彼らの說にはもちろん言及しないが，二十世紀になされたフィールーズクーフ同定に關する議論を紹介した上で，結局この場所を國家の都として選擇する積極的な理由を見つけるのは難しい，と著者は述べている。ただ，もしかしたらアケメネス朝の行政中心であったスーサに對し，儀禮の場所としての意味を持ったとされるペルセポリスの例を參照できるかもしれない，とも注記する。著者が指摘するのは，1163 年，アラー・アッディーン・フサイン・ジャハーンスーズ ʿAlāʾ al-Dīn Ḥusayn Jahānsūz の息子サイフ・アッディーン Sayf al-Dīn が死去した後，サイフ・アッディーンの從兄弟にあたるギヤース・アッディーン Ghiyāth al-Dīn Muḥammad がフィールーズクーフで卽位し，それに異を唱えた叔父ファフル・アッディーン Fakhr al-Dīn がバーミヤーンからフィールーズクーフを目指して軍を率いて進軍した，という出來事である。結局ファフル・アッディーン軍は擊退されたが，スルデル=トミンはこの出來事の背景として，フィールーズクーフがゴール朝のスルタン，あるいはシャナスバーニー家の當主としての卽位儀禮の場所として重要な意味を持ったのかもしれない，と推測するのである（Sourdel-Thomine 2004 : 50–51）[9]。

ある王國・政治勢力の中に複數の中核都市があり，そのうちの一つが王朝創業の地であり，その後も儀禮の場としての意味を持ち續けたという例は，實はゴール朝にかなり

9） なお，パテルもフィールーズクーフを “‘capital’ being monumentally conceived” と形容している（Patel 2022 : 87）

近い時代にも認められる。ガズナ朝が東部アフガニスタンを中心に大帝國を築く以前，北西インドからアフガニスタン東部を支配していたのは，イスラーム資料にカーブル・シャー Kābul Shāh とか，シャーヒーヤ Shāhīya として登場する國であった。この王國は七世紀，ハラジュ Khalaj と呼ばれるテュルク系の集團によって建てられたのだが，九世紀初めに王統が變わり，インド系の王家が支配者となった。便宜上前者をテュルク・シャー Turk Shāh，後者をヒンドゥー・シャー Hindū Shāh とも呼ぶ。テュルク・シャーにとってカーブルは創業の地であり，ガンダーラ Gandhara の副都ワイヒンド Wayhind（Udabhāṇḍapura/ Hund）は冬の都として用いられたが，ヒンドゥー・シャー時代にはワイヒンドが主たる都で，カーブルが副都，夏の都であったとおぼしい。ところが十世紀に記されたアラビア語やペルシア語の地理書では，このインドのシャーは，カーブルにおいて卽位儀禮を行うまでは王として認められなかった，と記されている。その卽位儀禮がどのようなもので，なぜそこで行われなければならなかったのかについては別に述べたことがあるが（稻葉 2020），ここでも簡單に見ておきたい。十一世紀の碩學ビールーニー Abū Rayḥān al-Bīrūnī は，*Kitāb taḥqīq mā li al-Hind* の中で，カーブル・シャーの始祖について以下のような話を紹介している。

> 彼ら（インド人達）にはカーブルに住む王達がいた。彼らはテュルクでもともとはチベット Tubbat から來たのだと言われている。彼らの最初の者はバルハテギン Barḥategin で，彼はカーブルに來てある洞窟の中に入った。うつ伏せになって這っていく以外にそこに入ることは不可能だった。洞窟の中には水があった。彼はそこに何日か分の食料を置いておいた。この洞窟は今ではその地で *bfr* と呼ばれている。［今も］それ[10]を吉兆とみるものは中に入り，出てくるときには，大變な苦勞をして件の水を携えて出てくる。［バルハテギンが洞窟に入った時には］その入り口のところでは農夫達が働いていた。このようなことがらは，誰かと示し合わせていないと可能にはならないのだが，［この時バルハテギンと］示し合わせていた相手は一團の者達を連れてきて，夜も晝も交替で働かせ，その場所から人がいなくなることがないようにしていたのだった。彼が洞窟に入ってから數日して，一人の男が洞窟から出てきた。人々が集まってきたが，彼らには，その人物が［洞窟から出てきた樣子が］，まるで母親から生まれ出たかのように見えた。その者はテュルク風の服，チュニックや帽子，靴や武具を身につけていた。［人々は］彼が神がお創りになった［特別な］人物で，王となるために創造されたのだと褒め稱えた。［結局］彼はこの地を

10） ザハウ Eduard Sachau（1910 : ii, 10）は，「バルハテギンという名を吉兆と考える者は」と譯している。

支配して，カーブルの *shāhiya* と稱された。王權は彼の子孫に代々受け繼がれ，おおよそ六十代を重ねたという。(Bīrūnī : 317 ; cf. Sachau 1910 : ii, 10)

ビールーニーが批判的に語るように，最初のカーブル・シャーは洞窟から全く異なる外見で現れることで，ある種の「再生儀禮」を行ったのであり，十世紀のカーブル・シャー達が卽位に際して行った儀禮としてはこれが最も相應しいのではなかろうか。王位繼承者は洞窟儀禮を行うことで王として再生された，ということである。

もちろんフィールーズクーフは知られている限り，シャナスバーニー家の初期の歷史と關係があったとは思われず，カーブル・シャーの事例をそのまま適用して考えることはできない。結局，シンプルで整合的な說明を與えることは現時點でもまだ難しいようである。なんらかの場所や器物に「儀禮的」とか「宗敎に關連する」という說明をとりあえず付すというのは，發掘調査等の際に用途が不明な場所や遺物が見つかった際しばしば行われることであり，スルデル=トミンの案にも少しそういう嫌いはあるのかも知れない。ただ，おそらくフィールーズクーフの背景には單純な一つの理由ではなく，いくつもの要素や，その時々の政情，あるいはゴール朝が置かれた大狀況などが複雜に絡み合っていたのではないかと考えられる。この點については後でもう一度觸れることとする。

## 4. シャナスバーニー家と *dār al-mulk*

ところでここまで當然のように「都」という言葉を使ってきたが，もちろん原語は *dār al-mulk*，直譯すれば「王權の家」である。王權を持つ王がいる場所，ということで，特に固定された場所をもともと意味したわけでもないはずだが，一般に王國の中心的な地位にある都をこのように呼ぶ，もしくは歷史資料を讀む我々の側がそこに自分たちの持つ首都のイメージを幾分か投影して讀んできた。トーマスはジャーム＝フィールーズクーフがたとえ我々が想定するような意味での初期イスラーム時代的都でなかったとしても，だからといってそれが都でなかったわけではないだろう，と述べるが，そこで問題になるのは都とは何かという點である。これについても別稿で述べたことがあるのだが，この問題について本格的に考えようとするなら，そもそも國境線などが畫定できていない前近代の政治勢力について，王國というのをどのように規定，畫定するのかというやっかいな問題を同時に考えねばならなくなる。それはここでは果たし難いので，とりあえずゴール朝に關して *dār al-mulk* という語がどのような用いられ方をしているのかを檢證してみることとする。上述のようにさらなるフィールドワークが望みがたい現狀，手持ちの情報を再度整理しておくことにも意味があると考えるからである。

1146年頃，シャナスバーニー家の當主イッズ・アッディーン ʿIzz al-Dīn が死去した際，彼の七人の息子に領地が分割されたことをジューズジャーニーは次のように記す。

> スルタン達の父，イッズ・アッディーン・フサイン Malik ʿIzz al-Dīn Ḥusayn —— 彼に神の慈悲のあらんことを —— が死ぬとスルターン・スーリー Sūrī が彼の後を繼いで卽位した。バーミヤーンの地を（？）兄弟達に分け與えた・・・
>
> この地域では（？グールの地では）ワルサール Warsār（Warshād）が「山の王 Malik al-Jibāl（＝Quṭb al-Dīn）」に與えられた。「山の王」の *dār al-mulk* はそこであった。その後彼は，自分の權威（ḥaḍrat）にふさわしい堅固な砦，素晴らしい居處（mawḍiʿ-yi shigarf）を建設できるような場所を求めようと思いついた。四方に信臣達を送り，その結果彼はフィールーズクーフ Fīrūzkūh の地を選んだ。フィールーズクーフの砦とまちの建造を命じた。スルタン・スーリーはイスティーヤ Istīya のまちと砦を *dār al-mulk* とした。ナースィル・アッディーン・マフムード Malik Nāṣir al-Dīn Maḥmūd にはマーディーン Mādīn が與えられた。バハー・アッディーン・サーム Bahā’ al-Dīn Sām はマンディーシュ Mandīsh の *dār al-mulk* であったサンガ Sanga に任じられた。ワジール Wajīr（WJTR）の砦（qalʿa）はアラー・アッディーン・ジャハーンスーズ ʿAlā’ al-Dīn Jahānsūz に與え，ファフル・アッディーン Malik Fakhr al-Dīn にはカーシー Kāshī の地方が定められた，と考えられている（Jūzjānī : i. 335-336）。

イッズ・アッディーンの息子たちのそれぞれに與えられた場所が全て正確にわかっているわけではないが（この點については後述），ここでは「山の王」クトゥブ・アッディーンや，スーリー，バハー・アッディーン・サームにあたえられたまちがそれぞれ *dār al-mulk* と呼ばれている。シャナスバーニー家の一族がそれぞれ *malik* を名乘ったのだとすれば，彼らの居地が *malik* のいる場所という意味での *dār al-mulk* と呼ばれるのは不思議ではない。ただ一方で同じ年代記の後半，北インドのムスリム王朝の記述においては *dār al-mulk* と呼ばれるのは，スルタンのいたデリー Delhi だけであるという點と對比すると，ジューズジャーニーの中で *dār al-mulk* という言葉が不統一に用いられているのか，あるいは彼が基づいた異なる資料が，彼自身の用法と違う用い方をしていたのかのどちらかだろうが，この場合は後者の可能性が高い。というのも，ゴール朝の初期の歷史について，ジューズジャーニーは散逸したムバーラクシャー Fakhr al-Dīn Mubārakshāh Marvazī の年代記に依據したと述べていて（Jūzjānī : i, 319），イッズ・アッディーンの息子達への領地分けなどは，こちらの資料にあるのをそのまま引いたと思われるからである。しかしながらジューズジャーニーの年代記全體を資料論的に論じるのは筆者の手に餘るし本稿の目的からもずれるので，ここでは可能性の指摘にとどめたい。ただパテルも，

ジューズジャーニーが，自分が執筆した時代（十三世紀半ば）における「歴史記述への期待」に沿って，實際はバラバラな家系が定期的に集まったという連合的な實態から，フィールーズクーフを中心として體系的統治を布いたシャナスバーニー王朝というものを拾い上げようとしたのではないか，と述べている（Patel 2022 : 62）。誰のために拾い上げようとしたのかと言えば，當然，當時のデリー政權のスルタンであり彼のパトロンであった，クトゥブ・アッディーン・アイベグ Quṭb al-Dīn Aybeg（ムイッズ・アッディーン Muʿizz al-Dīn Muḥammad のグラーム出身）の猶子のごとき人物だったイルトゥトゥミシュ Iltutmish や，デリー政權の樞要部にいたゴールに關連する人々のためであっただろう。要するにフィールーズクーフを中心としたゴール朝の權力ピラミッドは，多分にジューズジャーニーの創作物に近いものだったのかもしれず，だとすれば *dār al-mulk* という言葉を年代記から拾い出して檢討してもあまり實質的ではないという身も蓋もない話になってしまいはする。

## 5. ザミーン・ダーワル

それでも，少なくともイッズ・アッディーンの息子達に分與された領地が，ゴール朝の支配領域の擴大という現象にとって意味を持つ場所だったと考えること自體はそれほど誤ってはいないだろう。そしてそれは初期のゴール朝の發展のステップとなんらかの關連を持っているのではないか。以下この點について少し詳しく考えてみよう。

ジューズジャーニーは，ゴール朝のスルタン，ギヤース・アッディーンの治世について記す中で，フィールーズクーフは夏の都であり，冬の都はザミーン・ダーワルにあった，と述べている。ザミーン・ダーワルとはイスラーム時代の初期，アフガニスタンの南部について頻繁に言及される地名で，位置的にはブスト Bust の北，ヒルマンド Hilmand 川の本流と，その大きな支流であるムーサー・カラ Mūsā’ Qalʿa 川に挾まれた三角形の地域を指すとおぼしい。前述のようにザミーン・ダーワルはアラビア語では Arḍ al-Dāwar や Bilād al-Dāwar などと呼ばれ[11]，要するに「Dāwar の地」であるが，dāwar は dād-war あるいは dāt-war で「公正／正義をもたらす」という語が約まったものと考えられている（cf. “ZAMĪNDĀWAR,” *EI2*）。ちなみに七世紀のバクトリア語文書や，グーズガーナーン Gūzgānān 發行の貨幣には Zhulad という名前が見え，こちらは žūn-dād

11） 冒頭で言及したイスタフリーは，Baladay Dāwar「ダーワルの二つのまち」という呼稱を用いているが，これが何を意味しているのかは明らかではない。一方アラビア語の arḍ や bilād はペルシア語の zamīn とよく對應する。Minorsky 1970 : 345 を見よ。

（あるいは žūn-dāt-war），すなわち「žūn 神によって（正義を）與えられた」という語の約まった形である（Sims-Williams 2010 : 65-66）。『隋書』の漕國傳には，罽賓（＝カーピシー＝カーブル）の王として「順達」という名前が言及されているが，これも žūn-dāt の音寫に違いない。ザミーン・ダーワルの場合も「公正をもたらした」のは žūn 神であったはずで[12]，それは七世紀半ばに，アラブの將軍アブドゥッラー・ブン・サムラ ʻAbdullāh b. Samura 率いる軍がこの地で zūr（＜zūn＝žūn）と呼ばれる神を祀る神殿を破壊したとバラーズリー al-Balādhurī が記しているからである（Balādhurī : 489）[13]。

地理書や年代記の記錄に據れば，この地域は北でゴールと接していた。分水嶺を挾んでヒルマンド川上流の西に位置するファラールード Farāh Rūd 川上流域はゴールの南部とみなされている。ボールは，シャナスバーニー家が營んだ冬の都とは，ザミーン・ダーワル中央部に位置する Shahr-i Kuhna（32.35530497 N, 64.98592179 E）ではないかと示唆している[14]。

ところで前稿でも觸れたが，ゴール朝の出現に先立つ十一世紀前半，ガズナ朝のマフムード Maḥmūd b. Sebüktegin（位 997-1030）は少なくとも三回のゴール遠征を敢行している。最初の二回はブスト，ザミーン・ダーワル方面からゴールに攻め込んでおり，1010 年の遠征では，ブストからザミーン・ダーワルを經て北上し，最終的にはハリールード川上流のアーハンガラーン Āhangarān の城[15]を攻め落とし，二回目の 1015 年の遠征では，ゴール地方のうちザミーン・ダーワルと境を接していたハービーン Khwābīn を攻略している。上述のように，ザミーン・ダーワルの北にはヒルマンド水系とファラー

12） ボズワース Clliford Edmund Bosworth は上掲 *Encyclopaedia of Islam* 新版の記事で Marquart & de Groot 1915 に據りつつ，この點に言及する。マルクヴァルトは，ザーブリスターンの支配者の稱號を Zunbīl と讀む彼獨自の見解の說明の中で dāwar＜dādvar を示しているのだが，筆者はこの稱號自體はテュルクの稱號 iltāber の轉訛形 Rutbīl（あるいは Ratbīl）と讀むべきであると考えている。それでも dāwar の語源の說明についてはこの見解に從いたい。

13） ちなみにヒルマンド川本流とムーサー・カラ川の合流地點の北側，支流の名前にもなっている Muṣā Qalʻa の村のやや南側に Deh-i Zūr，すなわち「Zūr の村」という場所がある（32.30820648 N, 64.75052415 E. なお，本稿では緯度經度を十進法表記で示す）。ボールの *Archaeological Gazetteer of Afghanistan*（revised edition）, No. 291, DEH ZŪR Or KĀFIR QALʻA の項目には「小さな丘のうえに廢墟があり，おそらくは Zūr 神殿の跡」とあるが（Ball 2020 : 111），殘念ながら本格的な調査は行われていないようである。

14） Cf. Ball 1988 : 132. ただしボールは，Shahr-i Kuhna が，Shahr-i Dāwar，つまりザミーン・ダーワルの中心都市だったであろうと記している。この場所がゴール朝の冬の都「ザミーン・ダーワル」でもあった可能性は口頭で筆者に告げられた。

15） チャグチャラーン Chaghcharān の西 20 km ほどに今も地名が殘る（34.472493 N, 65.060616 E）。

ルード水系の分水嶺となっている山脈があり，そこを西に越えたところはタイワラ地方で，この地はかつてホルディックがフィールーズクーフの候補ではないかと見た，十九世紀のゴールの中心地であった。川沿いに開けた平地で耕作地にも恵まれている。實は1020年の第三回目の遠征の最終到達地として *Tārīkh-i Bayhaqī* に見える *twr* はこのタイワラではないかと推測されるのだが（稲葉 1999 : 26），このタイワラの北にチェヘル・アブダル Chehel Abdal（あるいは Chehel Abdalān）と呼ばれる標高約 3900 m の山嶽が聳え立っている。コーフザードは二十世紀半ばに發表したゴール地方の地誌の中で，この山の裾野がマンディーシュと呼ばれていたと述べている（Kohzad 1954）。

## 6. マンディーシュ

上述のようにマンディーシュはイッズ・アッディーンの七人の息子のうち，バハー・アッディーン・サームに與えられた地域で，その *dar al-mulk* はサンガだったとされている。ジューズジャーニーはこのマンディーシュこそがシャナスバーニー家のもともとの領地だったと記していて，筆者は前稿において，このマンディーシュはガズナ朝のマフムードの二人の息子，ムハンマド Muḥammad とマスウード Mas'ūd のうち，廢位された前者を後者が軟禁した場所と同一ではないかと述べた。實はそれまでマンディーシュの位置については，1010年のガズナ朝の遠征の最終到達點となったアーハンガラーンの近邊，すなわちハリールード川沿いだとされていたのだが，ムハンマドはテギーナーバード Tegīnābād（現在のカンダハール）にあったクーフティーズ Kūhtīz という砦からこの場所まで移送されたという *Tārīkh-i Bayhaqī* の記述（Bayhaqī : 62-64）と重ね合わせ，マンディーシュはそんなに北ではなく，ゴール南部，ザミーン・ダーワルからそれほど遠くないところではないかと考えたのである（稲葉 1999 : 23-24）。實は前稿を發表した 1999 年當時，淺學にも上述のコーフザードの地誌の記述を知らなかったので，ここでその後の調査の內容を加味して，再度マンディーシュの位置について以下少しく論じてみたい[16]。

16） ミノルスキー Vladimir Minorsky は *Ḥudūd al-'Ālam* の記述の分析から，ゴール朝以前にゴールで勢力を持っていたとおぼしい王 Darmashī-shāh と Ghūr Shāh をそれぞれ，シャナスバーニー家とそのライバルと目されていた Shīth 家にあてはめることができるかもしれない，との試案を示している（Minorsky 1970 : 333）。もしその通りであれば，Darmashī Shāh の領地たる Darmashān と，シャナスバーニー家の故地であるマンディーシュは同じ場所あるいは包含關係にあるはずである。ところが *Ḥudūd al-'Ālam* は Darmashān について，それが二つの地域からなっており，一つはブスト，一つはグーズガーナーンである，↗

チェヘル・アブダル山はタイワラの北にある孤立峰に近い地形の山嶽で，特にその南側には河谷と平地が廣がっている。コーフザードがこの山の南麓のどの部分をマンディーシュと呼んだのか，彼の記述からは正確にはわからないが，實はチェヘル・アブダル山の西側，今のサガール Saghār 地方でトーマスらは非常に古いミナレットの痕跡を確認した（Thomas et al. 2014）。このミナレットはいくつかの報告で Manār-i Zār Murgh と呼ばれており，そのすぐ東には Zārmurq という名の山がある。ジューズジャーニーはシャナスバーニー家の祖となったザッハーク Zahhāk の子孫のビスターム Bistām が，Zār-i Murgh という山裾に居を定めたこと（Jūzjānī : i, 322），シャナスバーニー家の城と王都はマンディーシュのザーレ・ムルグの山裾に建てられたこと（同 328）[17]，シャナスバーニー家の第六代アミール，アッバース ʻAbbās b. Shīth が城壁をザーレ・ムルグ山の支脈に向けて擴張したこと（同 331）などを述べているので，マンディーシュがザーレ・ムルグという山の山裾にあったことは明らかである。それゆえトーマスらはこのミナレットのあるサガール地方がマンディーシュの所在地だったのではないかとする。ただ，トーマスらが確認したミナレットとその近くの山はタイワラから見てずいぶんと西にあり，カンダハール方面から到達するのは簡單ではなさそうである。實はコーフザードはチェヘル・アブダル山の東南麓に遺跡があることを報告している。正式な調査がなされていないためどの時代に屬するかは不明だが[18]，筆者は，こちらがマンディーシュの城と關連していて，實はチェヘル・アブダル山自體がザール・ムルグ山とかつては呼ばれていた可能性を想定している。ただ，今のところそれを證する材料はない。それでも十九世紀のフランスの旅行家フェリエ Joseph-Pierre Ferrier が，チェヘル・アブダルの山は周邊

---

↘ という不可解な記述をしている（Minorsky 1970 : 106）。*Ḥudūd al-ʻĀlam*，と *Ṭabaqāt-i Nāṣirī*, の記述，そしてミノルスキーの想定に忠實であろうとしたオニール Michael O'Niel は南北に二つの Darmashān を描き，北の Darmashān のすぐ南側にマンディーシュを置いている（"GHŪRIDS", *EI3*）。パテルもそれにならい，マンディーシュは實はゴール地方の中でハリールード川沿岸から南まで延びる廣大な地域である，と述べている（Patel 2022 : 84）。しかし *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の記述からも，マンディーシュがそれほどに廣大な地域であったという印象は得られず，筆者は，Darmashī Shāh をシャナスバーニー家に同定したミノルスキーの假說が誤っているか，あるいは Darmashān に關する *Ḥudūd al-ʻĀlam* の記述に混亂があるか，どちらかではないかと疑っている（後段參照）。

17） 原文では「シャナスバーニー家の城と王都はこの山の裾野に建てられる，と人々は語っていた」という文章になっている。

18） Ball 2020 : 81 に示される 33.6244312 N, 64.45665777 E は，チェヘル・アブダル山の東南側の地點にあたる。また，フェリエはチェヘル・アブダル（彼は Tschalap Dalàne と呼ぶ）の東南麓に Kalèh-Kaïssar, Kalèh-Singui, Fakhr-Abad の三つの遺跡があったと述べる（Ferrier 1860 : ii, 8-9）。ただし，ゴール中央部に關するフェリエの記述には不明な點が多いことを，ホルディックが指摘している。Holdich 1910 : 476-499 參照。

の地域を見下ろしている（Ferrier 1860 : ii, 9）と記していることは，バイハキーが，マンディーシュの砦は遙か遠くからでも目睹し得た，と書いていることと對應しそうには見える。

ところでこのマンディーシュという地名は，管見の及ぶ限り *Tārīkh-i Bayhaqī* と *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の二種の資料に現れている[19]。*Tārīkh-i Bayhaqī* については古寫本が殘っていないという問題があって，1970 年に同書の定番となる校訂テキストを出版したファイヤーズ ʻAlī Akbar Fayyāḍ や最新の校訂テキストの編者ヤーハッキー Muḥammad Jaʻfar Yāḥaqqī らは，この地名の比定に *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の內容を利用している。

*Ṭabaqāt-i Nāṣirī* にはいくつかの古寫本が知られており，ラヴァティー Henry Goerge Raverty は同書の英譯の序文で，彼が利用した，あるいは所在を確認した寫本 12 點に言及している（Raverty 1881 : i, vi-x）。そこには言及されないが，筆者が把握している限りおそらく最も古い寫本の一つが，ヒジュラ暦 814 年（1411-12 年）に書寫された，いわゆるバイスングル・アルバム所收の寫本（Staatbibliothek zu Berlin, Ms. Petermann 386）である（cf. Robinson 1957 : 384）。この寫本でのマンディーシュという地名の現れ方には奇妙な點がある。すなわち مندیش، ملندیش، ملدس など表記が搖れるのである。もちろんこの地名の「正しい形」がمندیشであると認識されていたのは，この地名の初出箇所に次のような記述があることからも明らかである。

> アーフリードゥーン Āfrīdūn がザッハークに勝利し，王國を掌握したとき，彼の息子達のうちの二人が，ニハーヴァンド Nihāvand におかれた。兄弟のうち年長のスール Sūr はアミールとなり，年若のサーム Sām は軍司令官（sipāhsālār）になった。アミール・スールには一人の娘が，軍司令官には一人の息子があった。二人の從兄弟同士は幼い頃から許嫁であった。彼らは互いに心を決めあっていた。軍司令官のサームが死去した。彼の息子は立派な戰士，勇士に育っていた。當時勇敢さにおいて竝ぶ者のないほどであった。彼の父が死んだ後，彼を妬む者達が現われ，アミール・スールの前で彼を中傷した。叔父は彼に對して心證を害した。そして娘を諸侯

19） 正確にはガルディーズィー ʻAbd al-Ḥayy Gardīzī の *Zayn al-Akhbār*（Gardīzī : 438）にも一箇所あらわれる。そこではマフムードが財貨を隱した砦の一つとしてマンディーシュが言及されるが，具體的な所在地に關する情報は無い。なお，ヤーハッキーは自身が校訂した *Tārīkh-i Bayhaqī* の地名に關する注釋の中で，ファッルヒー Farrukhī Sīstānī の詩集（Farrukhī : 192）に見える mandīsh に言及するが（Bayhaqī : 1566），彼が參照する Dabirsiyaqi 編の詩集（*Dīwān-i Ḥakīm Farrukhī Sīstānī*）の當該箇所の半句（miṣrāʻ）は دیدی تو زو مرنج و میندیش تاترا，つまり mandīsh ではなく ma-yandīsh となっている。半句の前半部からみてもこれは地名ではなく文字通り「心配するな」と解すべきであろう。

(mulūk-i aṭrāf) の一人の嫁にしようと考えた。娘はそれを知り［従兄弟に］知らせた。彼はある夜，やって來て砦の門をあけ，アミール・スールの厩から十頭の選り抜きの馬を連れ出し，娘とその従者を乗せて持てるだけの金を持って出發した。そして道を急いで，ゴールの山裾に到着し，そこにとどまった。人々は［アミールの娘に］「彼のことは心配するな (zū ma-andīsh)。」と言った。その地は Mandīsh という名になった。彼らのことはその地で定まった。(Ms., Petermann 386 : 70b ; cf. Jūzjānī : i, 322)

ベルリン寫本ではこの最後の二つの文章に現れる Mandīsh は正しくمنديشと書かれているが，それ以外の箇所では，مليديشあるいはملنديسもしくはمليس と記されている[20]。もちろん二番目の子音をجと讀むか，اで讀むかは書寫生の書き癖のようなものも考慮せねばならず，ただちに「正しくない」というわけにも行かないかもしれないのだが，それにしても，近接した寫本の葉數の中でこのような搖れがあるのも不思議な話である。

一方，オクスフォード大學ボドレアン圖書館にも *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の寫本が二點所藏されている。このうち，Ms. Ouseley 66, 67 の二巻からなる寫本は奥付にヒジュラ暦 658 年 Rabīʿ I 月 5 日（1260 年 2 月 19 日）という年代が記されており，かつてはこれを原著者自身の手稿本だとする見方もあった。ただ，現在はこの日付は原著の執筆日時を寫字生がそのまま寫した可能性が高いと考えられており，寫本自體の書寫年代は確定されていない[21]。ただ，ベルリン寫本と比較すると多くの點で相違があるので，少なくともこの二つの寫本が同一系統に屬するわけではなさそうである。Mandīsh については Ms. Ouseley 66 においても表記が搖れている。こちらはمانديش／منديشという形は上掲の地名の語源に關する話の部分に一度出てくるのみで，それ以外の箇所でملنديشあるいはبلنديشと書かれている[22]。

この表記の搖れがなぜ起きているのか，筆者にはうまい說明が思い浮かばない。ただ，このことが示唆するのは，Mandīsh という地名が極めてマイナーなもので，上記二種の寫本が寫されたとき（おそらくインドで），寫字生にこの地名を正しく認識していた者がい

---

20) それぞれの形を記すなら次の通り。منديش (70b)；مليس (71a)；ملندس (71b)；ملنديس (72a)；ملندش (72b, 73b)

21) ラヴァーティー（1881, i, vii-viii）は，“India Office Library MS., No. 1952” の寫本について，これが奥付に原著の完成年月日のみを記している點から，“Bodleian Ms.” と “Royal Asiatic Society Ms.”，および “Paris National Library” 所藏の二點の寫本について，India Office Library 寫本の寫しか，あるいはこれら五つの寫本が同一の元寫本から寫されたものかもしれない，と記している

22) ボドレアンの MS. Ouseley 66 では，182b から 191a の間に八カ所現れるが，內譯はمنديشが一箇所，ملنديشが三箇所，بلنديشが四箇所である。مがبに置き換えられているのが目立つ。

なかったらしい，ということのみである[23]。

## 7. シャナスバーニー家の出發點

上述のように，チェヘル・アブダル山の山麓の何處かは別にして，マンディーシュの存在をハリールード沿いではなく，ゴール地方の南部に置くこと自體はおおよそ確定して良いのではないか。そうであるならシャナスバーニー家の擴大は，實はゴール地方の南部から始まったことになる。イッズ・アッディーンの死後，七人の兄弟が分け持った領土のうち，ワジールはかつてのワジーリスターン（いまのウルズガーン Urzgān）にあたるであろう。カーシーは，チャグチェラーンの對岸に今もその名前が殘っているが，ここにあたるのだろうか？イスティーヤについては，ハーシュルード Khāshrūd 川沿いに Istoway というむらがあって，十三世紀頃のものと思われるペルシア語文書が書かれた Istīw という場所がこれにあたるかとの想定がある[24]。ただし，Istoway 自體はゴールの山地の南西，平地に出たところに位置しており，このときイスティーヤを領有したスルターン・スーリーが兄弟の中でも中心的な人物だったことを考えると，彼の領土がゴールの山の外にあったとは考えにくい。類似の地名としてはタイワラの南に Istowan というむらがある。十二世紀にこの地名があったのかどうかは不明であるけれど，位置的にはこちらの方が相應しいかもしれない。ワルサールも場所は不明だが，*Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の記述は，それがフィールーズクーフからそう遠くないところであったとの雰圍氣を傳える。そうであるなら地勢的にはいまのシャフラク Shahrak 邊り[25]でもいいのかもしれない。マーディーンについて，パテルはガルチスターンと接するあたりだったのではないかと想像しているが，そもそもの出發點となるマンディーシュの同定が筆者とは異なるので，從いがたい。

それでも，これら各據點は，シャナスバーニー家がゴール南部から出發したとすると，

---

23） もともと *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の寫本調査は，ボドレアン圖書館所藏寫本から開始したのだが，この調査が可能になったのは同圖書館の Bahari Fellowship（2024-25）のおかげである。特に記して謝意を表する。また同書の寫本の檢討全般にあたっては，Invisible East プロジェクトに屬するアフガン人研究者 Nabi Saqee 氏との議論に大いに助けられたことを銘記しておく。

24） Invisible East Digital Corpus website（https://www.invisible-east.org/）で Istīb を檢索すると，Khalili Collection New Persian Documents Doc 37, 38, 39, 41 の四點がヒットするが，この地名 Istīb は假に Istoway に當てられている（IEDC Find Spot map 參照）。

25） ミナレットのあるジャームから南に 40 km ほどに位置する（34.107339 N, 64.307675 E），ジャームに最も近い「一定規模のまち」である。

その擴大の方向性を示すものととらえることができる。ゴールの東方についてはワジールが，ハリールード川中流域から西については，ワルサールとフィールーズクーフが，同上流域についてはカーシーが，そしてイスティーヤをタイワラ近くに比定できるなら，ファラールード川上流域を同地が，それぞれ據點として掌握しようとした，という風に考えられはしないか（圖 3 參照）。前述の 1010 年のガズナ朝によるゴール遠征の際，なぜシャナスバーニー家が北のアーハンガラーンへと逃れたのか，詳細はよくわからないが，もしかしたらアーハンガラーンからチャグチャラーンあたりにかけてはすでに勢力擴大の手をのばしつつあったためかもしれない。

筆者は前稿で，1020 年のガズナ朝の遠征軍の經路を參照しつつ，*Ḥudūd al-ʿĀlam* に見えるダルマシャーン Darmashān の王，ダルミーシュ・バト Darmīsh Bat の領域をハリールード川中流域，Ghorshāh の領地をタイワラ近邊に想定した（圖 4）。シャナスバーニー家はこれらライバルの勢力を屈服させ，帝國（というよりは連合體）を樹立したわけだが，このライバル勢力の領土と，六人の兄弟の領地は對應するのかもしれない。つまりダルミーシュ・バトの勢力圈を接收するための據點がワルサール／フィールーズクーフであり，ゴールシャーの據點タイワラを押さえるための重しがマンディーシュとイスティヤーだったのではないだろうか。*Ḥudūd al-ʿĀlam* はゴールの山地の東側にもう一人，Tamrān Waranda と呼ばれる豪族の存在に言及する。實はこの勢力は最近發表された著者不明のアラビア語年代記の一片にも登場するのだが（Haim 2024），ミノルスキーの位置

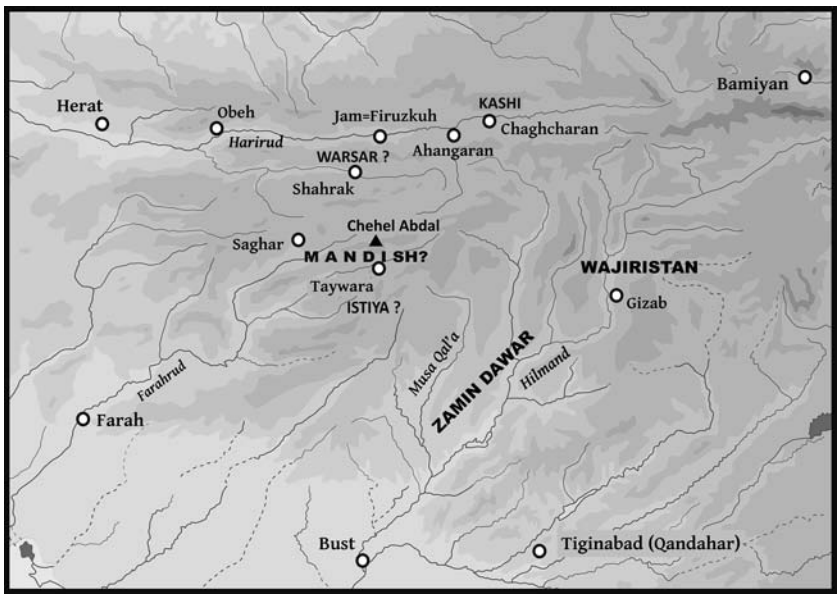



圖 3　マンディーシュの位置

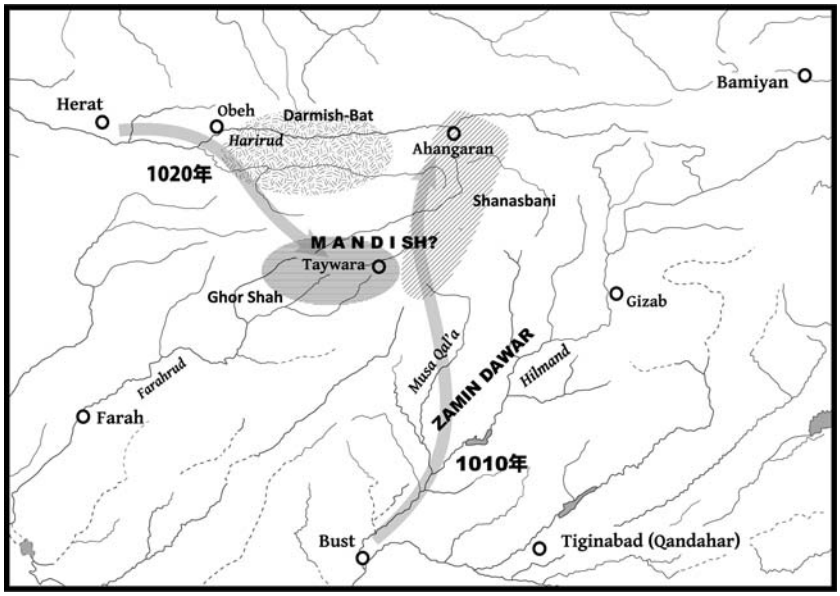



圖 4　ゴール朝以前のゴールの勢力圖

比定（Minorsky 1970 : 334）を參照するなら，これを抑えるための據點こそがワジールであったのだろう。

出發點となったチェヘル・アブダル山近郊は，前述のようにザミーン・ダーワルから分水嶺を越えて北西側にある。シャナスバーニー家とザミーン・ダーワルの關係は實はかなり深いように思われる。

レザーハーニーは，2021 年に刊行された貨幣學者マイケル・ベイツ Michael Bates への獻呈論集に，“Pangul and Banji ; Zhulad and Fulad : A note on the genealogy of the Shanasbids amirs of Ghur”と題する小文を寄せている。彼はその中で，ジューズジャーニーがシャナスバーニー家の初期の當主として名前をあげるバンジー Banjī という人物と，ザーブリスターンで七世紀後半に發行された貨幣に見える Pangul という名前を，また同じくジューズジャーニーがシャナスバーニー家の初代として名前を擧げるフーラード Fūlād を，やはり七世紀後半にグーズガーンで發行された貨幣やバクトリア語文書に名前が見える Zhulad と結びつけることができるのではないか，と述べている。ザーブリスターン貨幣の銘を Pangul と讀むことについては筆者は疑問を持っており，この說にはそのままでは從いがたいが，彼がこの同定を通じて，ゴール朝あるいはシャナスバーニー家の存在自體をそれ以前のアフガニスタンの歷史と接續して理解しようとした點には注目すべきだと考えている。

件のザーブリスターンの王國とは七世紀後半，カーブル・シャーの王國から分離して

成立した，いわゆる Rutbīl の王國のことであるが，これがもともとハラジュ・テュルクの民によって建てられたことは別に述べたことがある（稲葉 2004）。カーブルのテュルク王家は九世紀前半に，ザーブリスターンのルトビールの王國は 860 年代末にそれぞれ滅びるが，ハラジュ・テュルク自體はその後もアフガニスタン東部にとどまり，ガズナ朝軍にも雇われていた。*Ḥudūd al-ʿĀlam* によれば，ハラジュは當時ガズナやテギーナーバード，ブスト，バルフ，グーズガーンといった廣範圍に居住したと言う（Minorsky 1970 : 111）。一方，ブストに隣接するザミーン・ダーワルにもハラジュが居住していたらしいことは，シャナスバーニー家が勢力伸長期にザミーン・ダーワルにおいてハラジュの戰士達を多く軍に編入した，とのジューズジャーニーの記述から推測できる（Jūzjānī : i, 373）。同じくジューズジャーニーは，860 年代から 70 年代にかけてサッファール朝の勢力が增大し，ヤアクーブ Yaʿqūb b. al-Layth がザミーン・ダーワルを征服した際，當時のシャナスバーニー家の當主アミール・スーリー Sūrī が，恐れてスィンド Sind に逃れた，と記している（Jūzjānī : i, 327）。インダス川の下流域たるスィンドへ本當に逃れたのかどうか定かではないが，この逸話の背景にはザミーン・ダーワルの地がゴール南部／マンディーシュと密接な關係にあり，前者が制壓されたことがシャナスバーニー家の支配領域に直接的脅威となり得た，という雰圍氣を傳えている。前述のようにギヤース・アッディーン時代のゴール朝の冬の都としてボールは Shahri-Kuhna 遺跡を候補として擧げている。殘念ながらこの遺跡は組織的な調査が行われてはおらず，正確な年代もわからないが，上に述べたような狀況が存したのであれば，ゴール朝がザミーン・ダーワルに冬の都を置いたのも，そもそもその地と關係が深かったから，と考えることができるだろう。

## お わ り に

前稿で述べたごとく，1170 年代，ゴール朝はガズニとヘラートという當時のアフガニスタンで最も重要な都市のうちの二つを手に入れた。フィールーズクーフと比べてもこの二つの都市の政治經濟的重要性は遙かに高かったと考えられる（cf. Flood 2005）。それでもフィールーズクーフが帝國の都の一つと考えられていた背景には，これがヘラートとガズニ（あるいはバーミヤーンも含めて）という帝國の實質的中心據點を結びつける結節點のような位置にあり，スールデル・トミンが想定するような象徵的な意味合いも兼ね併せて，存續したのだというふうにも考えられるのではなかろうか。ただし，それでも食糧供給や交通網については詳細がわかっておらず，將來の課題としてまたも殘さねばならないのが殘念である。

いずれにせよシャナスバーニー家の出發點としてのマンディーシュをハリールード川中流域ではなくゴール南方に求めるべきであるのは，近二十年の研究成果を參照しても明らかであると考える。ゴール朝は南から北に向かい，そこから東西へと廣がる形で擴大したのであった。そして傳えられるイッズ・アッディーンの舊領の息子達への分配という史實あるいは物語の背景をなしたのは，そのようなシャナスバーニー家の擴大の方向性だったのである[26]。

このようにシャナスバーニー家の初期の歷史をゴール南部およびザミーン・ダーワルと結びつけることで，そもそも王朝の創設時にハラジュ族が關與していた可能性が浮上することをも本稿は指摘した。このことは，アフガニスタンにおける政治勢力あるいは人的集團の繼續性という點について一つの示唆を與えてくれる。クシャーン朝が滅びて以降，アフガニスタンには樣々な政治勢力が興起した。キダーラやアルハン，エフタル，ネーザク・シャーなど，いわゆるイラン系フンの諸勢力は相次いで強大化したが，興味深いのは，一つの政體が衰退した後，彼らがどうなったのかという點である。

玄奘が『大唐西域記』でアフガニスタン北部にエフタルと覺しき集團の集落（呬摩呾羅）が殘っていることを記錄しているのは良く知られている（cf. 桑山 1987 : 270–272）。五世紀末から六世紀前半，グプタ朝の領域を侵食し，一時强大な勢力を誇ったアルハンは，532 年頃に北西インドで敗北し，その後ヒンドゥークシュ南麓に戻ってカピシに王國を開いた可能性がある（これについては別稿で論ずる豫定）。一方この王國は七世紀半ばまで存續したがその後どうなったのかがよくわかっていない。吉田豊によれば，この王家の裔がタンゲ・サフェーダク Tang-i Safedak のバクトリア語碑文に現れる王 Alkhis である可能性があり，そうであるならアルハンのカピシ王國がカーブル・シャーに滅ぼされた後，一部はバーミヤーンのさらに西の山奥に逃れてしばらく存續したことになる（吉田 2013 : 62）。

上述のザーブリスターンのルトビールの王國は，先に同地を支配していた勢力を打倒して樹立されたはずであるが，先行した王國はおそらくネーザク・シャー貨幣の發行者

---

26） では，ハリールードの北側に關してはどうだったのだろうか。歷史的にはガルチスターン，すなわち「山の地」と呼ばれたこの地域が十一世紀から十二世紀にどのようであったのかを語る資料はほとんどない。地勢的にはハリールードの北に聳える山嶽地帶（フィールーズクーフ山脈）はハリールード水系と，北に向かって流れやがてメルヴ・オアシスを形成するムルガーブ川の間の分水嶺となっている。冒頭でも紹介したゴール朝期に書かれた近世ペルシア語文書のある部分はこのムルガーブ最上流域と關係しているものと推定されている（cf. https : //invisibleeast.web.ox.ac.uk/article/firuzkuh-papers-pre-mongol-persian-documents-todays-afghanistan）。これらの整理と研究がなんらかの手がかりをもたらしてくれることを期待するしかないだろう。

のそれである[27]。シムス=ウィリアムスは現在のガズニの南西，ジャーグーリー Jāghūrī 地方の山中から發見された 757 年の紀年をもつバクトリア語碑文についてその讀みと翻譯を發表している（Sims-Williams 2020-2021）。それによれば，この碑文は，フロム・ケサル From Kesar なる王または王子がインドの勢力に對して大勝利を收めたことを讃える內容を持っている。八世紀前半のカーブル・シャーであり，最も威名が鳴り響いていたであろうフロム・ケサル（一世）は 745 年に息子に王位を讓っているので，この碑文に現れるのは同じ名前を持つ彼の孫であろうというのがシムス=ウィリアムスの見解であるが，位置的にはザーブリスターン王國の當時の支配者ルトビールの勢力圈に屬していた可能性があるこの深い山奥に，なぜそのような內容の碑文が刻まれたのかは明らかではない。一般にこのような碑文の建立目的として想定可能なのは，王權に順わない勢力に對して，支配者の威勢を顯示することであろうが，假にそうだとするとその順ろわない勢力とは誰だったのか。詳細は別に述べる豫定だが，實はこの碑文が置かれる場所の近郊にはヴェラルディ Giovahni Verardi が報告する石窟群があり（cf. 稻葉 2003），この山中のバクトリア語碑文はもしかしたら，ハラジュに滅ぼされたネーザク・シャー王國の殘滓がこの地域に逃げ込んでいたという狀況を反映しているのかもしれない。

いずれにせよ，政治勢力としての「～王國」「～連合體」が崩壞した後も，それを構成していた部族集團などなどは殘存し，新しい勢力に吸收されるか反抗するかしたはずで，そのことはより規模の大きな中央アジアの遊牧帝國の興亡を參照すれば明々白々である。もしゴール朝の成立にハラジュが大きな役割を果たしていた，あるいはそもそもシャナスバーニー家がハラジュ族と關係していたなら，この事例もまたアフガニスタンにおける政治勢力の消長の興味深い例として位置づけることができるだろうし，現代に至るまでのハラジュ族の長い長い歷史（cf. 稻葉 2004）の中の一コマとなりうるかもしれないが，現時點ではまだ妄想の域を出る話ではない。なにより，アフガニスタンのような複雜な地形と人間集團の混淆の長い歷史を有する場所において，ある政治集團の民族的出自とアイデンティティーに過度に重きを置く議論を行うことには十分愼重であらねばならない。

**文獻表**

一次資料

Balādhurī : al-Balādhurī, Aḥmad b. Yaḥyā, *Futūḥ al-Buldān*. ed. Ṣalāḥ al-Dīn al-Munajjid, Cairo, 1956.

27） ザーブリスターンにおけるネーザク・シャー貨幣とその發行者については，Vondrovec 2014 : i, 449-460 を參照。

Bayhaqī : Abū al-Faḍl Bayhaqī, *Tārīkh-i Bayhaqī*（2 Vols.）ed. M. J. Yāḥaqqī, Tehran : Intishārāt-i Sukhan, 2009.

Bīrūnī : Abū Rayḥān al-Bīrūnī, *Taḥqīq mā lil-Hind*. Beirut. 1983.

Farrukhī : Farrukhī Sīstānī, *Dīwān-i Ḥakīm Farrukhī Sīstānī*. ed. M. Dabirsiyaqi, Tehran : Sharakat-i Nasabī Ḥājj Muḥammad Ḥusayn Iqbāl va Shirkā', 1957.

Gardīzī : 'Abd al-Ḥayy Gardīzī, *Tārīkh-i Gardīzī*, ed. 'A. Ḥ. Ḥabībī, Tehran : Dunyā-yi Kitāb, 1988.

Iṣṭakhrī : Abū Isḥāq Ibrāhīm al-Iṣṭakhrī, *al-Masālik wa al-Mamālik*. ed. M. J. De Goeje, Leiden : Brill, 1967.

Jūzjānī : Minhāj Sīrāj Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i Nāṣirī*. 2 vols., ed. 'A. Ḥ. Ḥabībī, Kabul : Anjuman-i Tārīkh-i Afghānistān, 1964.

二次資料

Ball, W.（1988）"Seven Qandahārs : The Name Q. ND. HAR. in the Islamic Sources," *South Asian Studies* 4, 115-142.

————（2002）"The Towers of Ghur. A Ghurid 'Maginot Line'?" In : W. Ball and L. Harrow（eds.）, *Cairo to Kabul : Afghan and Islamic Studies presented to Ralph Pinder-Wilson*. London : Melisende, 21-45.

————（2020）*The Archaeological Gazetteer of Afghanistan*（Revised Edition）. Oxford : Oxford University Press.

Ferrier, J.-P.（1860）*Voyages en Perse dans l'Afghanistan, le Bélouchistan et le Turkestan*. 2 vols., Paris : E. Dentu Éditeur.

Flood, F. B.（2005）"Review : *Le Minaret Ghoride de Jām*," *The Art Bulletin* 87(3), 536-543.

————（2009）*Objects of Translation : Material Culture and Medieval "Hindu-Muslim" Encounter*. Princeton : Princeton University Press.

Haim, O.（2024）"The Indian Frontier in the Samanid Period Based on a New Source," *Journal of American Oriental Society* 144(4), 765-787.

Herberg, W.（1976）"Topographische Feldarbeiten in Ghor : Berichit über Forschungsarbeiten zum Problem Jam-Ferozkoh," *Afghanistan Journal* 3(2), 57-69.

Holdich, T. H.（1910）*The Gates of India : Being an Historical Narrative*. London : MacMillan and Co.

稲葉穣（1999）「ゴール朝と 11-12 世紀のアフガニスタン」『西南アジア研究』51, 16-42.

————（2003）「ナーイ・カラ石窟開窟の歴史的背景について」『西南アジア研究』58, 83-96.

————（2004）「アフガニスタンにおけるハラジュの王國」『東方學報』76, 313-382.

————（2007）「ヤカウラングとリバーテ・カルヴァーン：ハザーラジャート北部の歴史地理」『オリエント』50(1), 53-79.

————（2020）「ガズナとフィールーズクーフ ―― 歴史的アフガニスタンにおける「都」についての覺書 ――」山田重郎編『科研費新學術領域研究「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の發生と變容の學際的研究 3』（研究成果報告 2020 年度）, 231-244.

Kohzad, A.'A.（1954）"Along the Koh-i-Baba and Hari-Rud, 5." *Afghanistan* 9(1), 20-43.

桑山正進（1987）『大唐西域記』（大乘佛典　中國・日本編 9）東京：中央公論社.

Lattimore, O.（1962）*Studies in Frontier History : Collected Papers 1928-1958*. London : Oxford University Press.

Le Berre, M.（1987）*Monuments pré-islamiques de l'Hindukush central*. MDAFA 24, Paris : Éditions

Recherche sur les Civilisations.
Leshnik, L.（1968–69）“Ghor, Firuzkoh and the Minar-i Jam,” *Central Asiatic Journal* 12, 36–49.
Maricq, A. et G. Wiet（1959）*Le Minaret de Djam*. MDAFA 16. Paris : Klincksiek.
Marquart, J. & J. J. M. de Groot（1915）“Das Reich Zābul und der Gott žūn vom 6.–9. Jahrhundert,” In : G. Weil（herausgeben）, *Festschrift Eduard Sachau*. Berlin : G. Reimer, 248–292.
松田和信（2020）「バーミヤーン出土佛教寫本研究の二十年」『東洋學術研究』59(2), 146–170.
Minorsky, V.（1970）*Ḥudūd al-ʻĀlam : Regions of the World*. 2nd ed. C. E. Bosworth, Cambridge : Cambridge University Press.
Patel, A.（2022）*Iran to India : The Shansabanis of Afghanistan c. 1145–1190 CE*. Edinburgh : Edinburgh University Press.
Pinder-Wilson, R.（2001）“Ghaznavid and Ghūrid Minaret.” *Iran* 39, 155–189.
Raverty, H. G.（1881）*Ṭabaqāt-i-Nāṣirī : A General History of the Muhammadan Dynasties of Asia, including Hindustān from A. H. 194 [810 A. D.] to A. H. 658 [1260 A. D.] and the Irruption of the Infidel Mughals into Islam*. 2 vols., London : Gilbert & Rivington.
Rezakhani, Kh.（2021）“Pangul and Banji : Zhulad and Fulad : A Note on the Genealogy of the Shanasbids Amirs of Ghur.” In : T. Daryaee, J. Lerner, and V. C. Rey（eds.）, *Dinars and Dirhams : Festschrift in Honor of Michael L. Bates*. Leiden : Brill, 219–230.
Robinson, B. W.（1957）“Prince Bāysonghor’s Niẓāmī : A Speculation.” *Ars Orientalis* 2, 383–391.
Sachau, E. C.（1910）*Alberuni’s India*. London : Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
Sims-Williams, N.（2001）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan* I : *Legal and Economic Documents*. London : Nour Foundation（Revised Edition in 2012）
————（2007）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan* II : *Letters and Buddhist Texts*. London : Nourishment Foundation.
————（2010）*Iranisches Personnamenbuch* II : *Mitteliranische Personennamen* 7 : *Bactrian Personal Names*. Vienna : Austrian Academy of Sciences.
————（2012）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan* III : *Plates*. London : Nourishment Foundation.
————（2020–2021）“The Bactrian Inscription of Jaghori : A Preliminary Reading,” *Bulletin of the Asia Institute* 30, 67–73.
————（2025）*Bactrian Documents* IV : *Documents from South of the Hindukush* I. London : Corpus Inscritionum Iranicarum.
Sourdel-Thomine, J.（2004）*Le minaret ghouride de Jām : un chef d’œuvre du XIIe siècle*. Paris : Boccard.
Thomas, D. C.（2018）*The Ebb and Flow of the Ghūrid Empire*. Sydney : Sydney University Press.
Thomas, D. C. et al.（2014）“The Rediscovery of the “Lost” Minaret of Qal’a-i Zarmurgh, Saghar, Afghanistan,” *Iran* 52, 133–142.
梅棹忠夫（1956）『モゴール族探檢記』東京：岩波書店.
Vercellin, G.（1976）“The Identification of Firuzkuh,” *East and West* 26(3–4), 337–340.
Vondrovec, K.（2014）*Coinage of the Iranian Huns and their Successors from Bactria to Gandhara（4th to 8th century CE）*. Vienna : Austrian Academy of Sciences.
吉田豊（1998）「Sino-Iranica」『西南アジア研究』48, 33–51.
————（2013）「バクトリア語文書研究の近況と課題」『內陸アジア言語の研究』28, 39–65.